《修士論文要旨》

聖徳太子信仰における『七代記』の諸問題

森田修平*

日本の古代における聖徳太子信仰では、『日本書紀』（以下、『書紀』）推古紀をはじめとして、様々な太子伝が編纂された。そのひとつである『七代記』は、宝亀二年（七七一）に教明という人物が撰したという記録があり、説話の成長度合いなどから考えても奈良時代のものと考えられる。ただしその全容は伝わらず、本来の規模・構成・成立年・撰者に関しても問題が多い。これは、この『七代記』と同様に、『日本書紀』の内容をもとにした太子の伝記・慧思後身説関係資料・十七条憲法の注釈などの共通する内容を持ちながら、書名や撰者が異なる『明一伝』や『異本上宮太子伝』（以下、『異本』）『天王寺障子伝』（以下、『障子伝』）といった太子伝が存在することが『七代記』の実態を把握することを困難にしている。先行研究においても様々な説が唱えられており、『七代記』をはじめとした諸書を別書とする説、同一書とする説、三書の関係を系統的に理解する説など、あらゆる可能性が指摘されている。

『七代記』等に関係する史料をできる限り集成し、それぞれを全体にわたって比較検討を行った結果、以下のような結論が得られた。

それぞれの伝記の構成については、『七代記』『明一伝』『異本』は同様に、太子伝と慧思後身説に関する諸書の引用から成るものと考えられる。『障子伝』については逸文が少ないこともあって詳しいことはわからないが、他の『七代記』等と同様の構成であることを示す例は見当たらず、八寺造立記事のみが共通する。

『七代記』『障子伝』『明一伝』『異本』の関係性については、少なくとも『上宮太子拾遺記』が引く『障子伝』については、『七代記』等とは異なる伝承を引いており、別書であると判断する。また、『七代記』『明一伝』『異本』については、逸文や構成の一致などからみて、異なる書名で伝わっているが同一の書であり、本来の書名を『上宮厩戸豊聡耳皇太子伝』と言い、その撰者は東大寺僧明一であると考える。

『七代記』と『障子伝』の成立年と撰者に関する問題は、宝亀二年（七七一）という年は四天王寺絵堂（障子絵）の造営年と考えられ、敬明（教明）等はそれの造営に当たった人物達であると考える。

平成24年度　*文学研究科文化財史料学専攻

『明一伝』の成立については、『大唐伝戒師僧名記伝』（『鑑真広伝』）の成立から明一の入寂までの間に比定することができる。鑑真一行の来朝は当時の太子信仰に大きな影響を与えたと考えられ、その影響の具体例として、慧思後身説を特色とした『明一伝』の成立や、『法隆寺縁起并資財帳』にある鉢や錫杖の出現というものが挙げられる。

『明一伝』については、鑑真とその弟子達の日本での活動も併せて、さらに検証を進めるべきである。